

## 尾瀬におけるツキノワグマの生息状況

財団法人 尾瀬保護財団 橋本幸彦

### はじめに

2003年以来深刻化している山ノ鼻地区でのクマの居座りや、1999年6月、2004年6月にヨシッ堀田代で発生した人身事故をふまえ(表1)、ツキノワグマの生息状況調査、関係者間協議、対策実施が必要であるとの認識に至った。そこで尾瀬国立公園利用適正化推進事業(環境省事業)において5カ年計画(2005-2009年度)で具体的な対策を実施することとなった。保護管理対策を実施していくにあたり、生息状況調査を行ったので報告する。

表1 尾瀬のクマ問題

地域	時期	問題点
ヨシッ堀田代	6月上旬	人身事故 1999年6月6日 午前7時30分頃
		2004年6月5日 午前8時30分頃
山ノ鼻	8月	2003年以降、山小屋周辺にクマ(R106)が居座る 2006年、高頻度出没(平年の2倍)
見晴	9月下旬- 10月中旬	山小屋・キャンプ場周辺から離れない (ブナ凶作年)
竜宮	6月中・下旬	2007年 R106が人前に頻繁に姿をみせた

### 目撃情報調査

地域や時期によって重点的に保護管理対策を実施するために、ツキノワグマの目撃情報を収集・分析した。

尾瀬では6月と8月に目撃情報が増える傾向があった(図1)。また、6月の目撃情報はヨシッ堀田代地区に多く、8月は山ノ鼻地区に多い傾向があった。

これらのことから6月にヨシッ堀田代地域に、8月に山ノ鼻において集中対策期間をもうけ対策を実施することとなった。

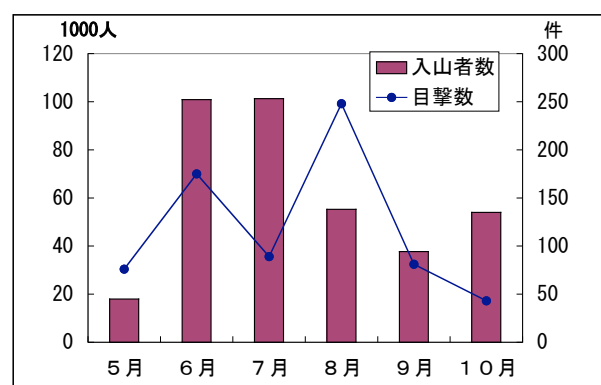


図1 尾瀬国立公園の入山者数とツキノワグマの目撃数(2000-2009年).

### 食性調査

ツキノワグマの出没原因として最も可能性が高いのは食物の探索である。このた

め、食性を調査し、①人為的食物への誘因の可能性、②各季節の主要な食物とその利用可能量について調査を行った。

食性の調査は糞分析によって行った。142個の糞を分析した結果、人為的食物は検出されなかった。また、採食品目は大部分が植物質で、5月～6月に草本類の葉・茎、8月から9月初旬まではミズバショウ、9月～10月には堅果類などが主食となっていた。

またミズバショウは2008年と2009年に、相対的な結実量を調査したが、2年で年変動は見られなかった。また、採食部位の栄養成分を分析した結果、他の食物に比べ、タンパク質の含有率が高かった。

一方、ブナの相対的な結実量を2005～2009年に調査した結果、ブナは年次変化が大きく、2005, 2009年が豊作、2007年が並作、2006, 2008年が凶作であった(図2)。

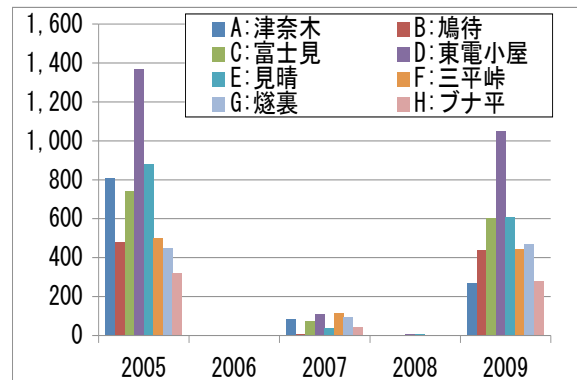


図2 ブナの相対的結実量の年次変化.

それぞれの季節の主食とツキノワグマの出没の関係は、まだはっきりとした傾向は見られない。今後情報を蓄積することが重要である。

### 生息数推定調査

保護管理の対象となる個体数を明らかにするために、定点観察調査を実施した。調査は4月下旬～5月上旬の残雪期に行い、斜面に出没するツキノワグマの個体数を数えた(図3)。



図3. 定点観察調査調査風景.

調査の結果、発見数・グループ数とも2007年に少なかったが、他の年は大きな変動はなかった(表2)。この結果から尾瀬地域全体に生息するツキノワグマの個体数は20～40頭で安定していると推定された。

本調査手法は、開発段階であるため、方法論の検討も今後の課題である。

表2 定点観察調査 調査結果

年	発見数	グループ数
2006	6～7	4～5
2007	2	2
2008	5～7	5～7
2009	7～8	5～6